

## ◇編集後記◇

早いもので、東日本大震災が起こってから8ヶ月経ちました。まだ寒さが残る中での被災、毎日報道されるニュースはすべて想像を超えるもので、当たり前だと思っていた日常がかくも無残に破壊される様に絶望感をおぼえることもありました。しかし、やがて春を迎え、津波の跡地に咲き出した一輪の花に、一方では生命の尊さを感じ、懸命に復興に取り組む方々の姿に胸打たれ、かえって励まされる思いもありました。再び、冬を迎えようとしていますが、被災された地域の1日も早い復興を祈念しております。

震災に引き続き発生した福島第一原子力発電所の事故と放射能汚染や健康影響の問題では、科学者の社会的責任が問われることとなりました。今、我々はこれらの諸問題に対して全力で対応する責務が課されています。震災発生から1ヶ月後に寄せられた清治先生からの話題提供は、産業現場（病院）で震災直後に何が起きていたかを教えてくれました。患者さんに残り少ない食糧を優先して配分し、空腹に耐えながら業務に対応した事などは、今後の我々の震災対策に大きな教訓を与えてくれたと思います。村田先生のボランティア活動や過重労働の話題提供、本学会からの震災に関連した労働者の熱中症予防対策についての提言等、多くの方がそれぞれの震災対応をしておられることに感銘を受けました。いずれも今後、我々の産業衛生活動に有益な情報を提供してくれると確信しています。編集委員会では引き続き、震災に関する

記事を募集していきますので、皆様からのご投稿をお待ちしております。

さて、久しぶり、といったら、「何を言っているか」と怒られそうですが、JOHの論文を見ました。随分多くの国から投稿されていることを実感しました。JOHが発刊された当時の編集委員長（佐藤章夫山梨医科大学名誉教授）が、「アジアの産業保健のリーダーとしてのジャーナルにしたい」と力説しておられたことを思い出します。これは、もう20年近く前のことでしょうか。初期の目的は既に達成できていると感じております。歴代の編集委員長の強いリーダーシップと編集委員の皆様とのチームワークの賜物と感謝しております。個人的には、今後は「アジアのリーダー的雑誌としての質の向上」を目指していく時期ではないかと考えています。そのためには何が必要か、編集委員会では議論しております。投稿された方にはお分かり頂けたと思いますが、「査読を迅速に行うこと」を一つの目標に掲げました。投稿されると、すぐ、査読者が選ばれ、早い場合ですと、一週間で査読が開始されます。これが質の向上につながると期待しております。と同時に、論文の仕上がりが具合によりますが、大変早く掲載されるようになっております。多くの会員の皆様からのご投稿をお待ちしております。しかし、会員皆様のご協力なしでは、査読作業は難しく、どうかこちらへのご協力も宜しくお願い致します。

（那須民江）

## 「産業衛生学雑誌」編集委員会

委員長：笹島 茂（三重大）

副委員長：櫻田尚樹（国立保健医療科学院）、杉森裕樹（大東文化大）、高尾総司（岡山大）、玉腰暁子（愛知医大）、那須民江（名古屋大）、西田和子（久留米大）、平工雄介（三重大）、藤野善久（産業医大）、毛利一平（労働科学研）、八谷 寛（名古屋大）

石竹達也（久留米大）、井上和男（帝京大）、岩崎健二（独法労働安全衛生総研）、植嶋一宗（三重大）、梅津美香（岐阜県立看護大）、小笹晃太郎（放射線影響研）、萱場一則（埼玉県立大）、川口陽子（東京医歯大）、熊谷信二（産業医大）、黒沢洋一（鳥取大）、近藤尚己（山梨大）、酒井一博（労働科学研）、佐々木美奈子（東京医療保健大）、菅沼成文（高知大）、田中昭代（九州大）、土井由利子（国立保健医療科学院）、中尾睦宏（帝京大）、中村裕之（金沢大）、馬場園明（九州大）、原田浩二（京大）、東 尚弘（東京大）、福島哲仁（福島県立医大）、堀口兵剛（秋田大）、丸山総一郎（神戸親和女子大）、三木明子（筑波大）、三宅達郎（大阪歯大）、村田勝敬（秋田大）、八幡勝也（産業医大）、大和 浩（産業医大）、吉田貴彦（旭川医大）、渡邊博且（産業医大）

〒160-0022 東京都新宿区新宿1丁目29番地8 公衆衛生ビル4階

電話 03-3356-1536 ファックス 03-5362-3746 振替 東京 00100-7-133495 番